

論文



翻訳ワークショップにおける訳文変化とスコポス意識の関連

中国の大学における実践事例をもとに

符 晓旭*

(中国・延安大学)

概要

本研究では、翻訳ワークショップを採用した翻訳教育を、中国のA大学日本語専攻の大学生を対象に実施した。翻訳ワークショップを通じた訳文の変化と学生のスコポス意識の関連性について明らかにするために、学生が作成した訳文を対象に、翻訳プロセスに関するデータと合わせ、質的記述的に分析を行った。その結果、スコポス意識は訳文の質に直接的かつ肯定的な影響を与え、質の高い訳文を作成するには学生のスコポス意識が重要であることが明らかになった。本研究の結果を踏まえ、今後の翻訳教育においては、学生のスコポス意識の育成の重要性とその育成方法としての実践的な翻訳ワークショップの有効性が示唆された。

キーワード：翻訳教育、授業デザイン、機能主義的翻訳理論、翻訳実践

© ALCE 2025. Except where otherwise noted, this article is licensed under the CC BY-SA 4.0 license

1. 研究背景と目的

2024年、中国翻訳業界は産業規模・企業数・人材数のいずれにおいても拡大を続け、翻訳従事者は680.8万人に達し、前年比6.0%増となった。翻訳需要が依然として拡大していることを示している（中国翻譯協会、2025）¹。中国の大学日本語専攻において、学部生向けの翻訳教育は、一定の翻訳テクニック・能力を身につけ、卒業後、基本的な翻訳実務に対応できる応用型人材を育成し、翻訳市場のニーズ

に応えることを目的としている（日語专业教学指导委员会、2020）²。

しかし、先行研究では、現在の翻訳教育は翻訳業界・市場のニーズと乖離していることが指摘されている（郭、2023；趙、李、2024）。教育方法に関しては「教師主導で知識を伝達し、学生は受動的に受け入れる傾向が強い」とされ（胡、李、2024, p. 4, 筆者訳³），教育内容も「言語レベル（文法や構文など）の誤り訂

* Eメール: fty1206@126.com

1 中国翻訳協会が作成する『2025中国翻訳行業發展報告』による内容。

2 中国の教育部（日本の文部省に相当する）高等学校外国言語文学専攻教育指導委員会が作成する『四年制大学日本語専攻教育ガイドライン』による内容。

3 「」で示されている日本語以外の文献および学生の記述・発言内容は筆者が翻訳したものである。

正や翻訳テクニックの習得に偏重している」と指摘されている(張, 2020, p. 181)。実際の翻訳作業では、訳者は孤立した文ではなく、テキスト全体を扱う。また、近年のAI翻訳技術の飛躍的な進展によって、単純な言語変換作業の価値は急速に低下しており、このことが翻訳教育と翻訳市場との乖離を一層顕在化させている。

もっとも、AI翻訳は効率面において優位性を持つ一方で、高度な判断やニュアンス調整、受け手に即した文化的対応といった領域には限界がある(劉, 2025, p. 122)。こうした状況において、人間の翻訳者は深層的な言語理解と文化的感受性を統合し、情報の取捨や用語の検証、意味決定などの場面で知恵と創造性を発揮する主体的役割を担っている(李, 張, 2023, p. 63)。したがって、機械翻訳が進歩する現代において、翻訳市場が求めるのは単なる言語知識の習得者ではなく、テキスト全体を視野に入れ、翻訳の目的や受け手に即して最適な訳出方針を判断できる人材である。

以上を踏まえ、本研究では、機能主義的翻訳理論を基盤に、実際の翻訳プロジェクトを中心にし、仲間と協力した翻訳問題の解決に重点を置いた翻訳ワークショップを採用した翻訳教育を実施した。本稿では、その翻訳教育実践における訳文の質とスコポス意識の関連性について、記述的分析を通じて検討を行った。

2. 先行研究と翻訳理論

2. 1. 翻訳教育における翻訳ワークショップ

「翻訳ワークショップ」とは、翻訳作業を行う人々が集まり、ある翻訳タスクに対して活発な意見を交換し、交渉し続けることを通じて、グループ全員が納得できる訳文に合意する活動である(李, 仲, 2010, p. 32)。教育方法としての翻訳ワークショップは、グループで実

際、またはシミュレーションの翻訳プロジェクトを協力して行う討論型教授法であり、学生は「翻訳作業・協働活動・ディスカッションの中で翻訳を学ぶ」(同上)ことができる。

翻訳教育における翻訳ワークショップの研究は、主に教育方法、コースデザイン、応用的価値などの翻訳教育に対する提案や指針などの理論研究を中心しているが、実際のデータを通じて翻訳ワークショップの効果の検証に焦点を当てた実証研究は少ない。王, 王(2013)では、学生へのアンケートから翻訳ワークショップに対する態度を、霜崎(2014)では、学生のフィードバック記述から、翻訳ワークショップに対する主観的評価を明らかにした。いずれも自己評価をデータとし、能力向上に焦点を当て翻訳ワークショップの有効性を検証したが、訳文をデータとする研究は見られない。しかし、翻訳市場では訳文の質が重要視されている。そのため、他のデータ・研究法より、訳文の質分析は翻訳市場のニーズに合い、客観的で説得力があると言える。そこで、本実践研究では翻訳ワークショップにおける訳文の具体例を分析し、訳文の質的变化をあきらかにする。

学生を翻訳市場に適応させるために、翻訳ワークショップの作業法は翻訳市場の実務に即したものである。翻訳プロジェクトはクライアントのニーズを満たし、特定の目的に即した訳文を提供することを目的とする。翻訳ワークショップでは、課題をプロジェクト形式で設定し、学生はクライアントの要望を想定しながら段階的に訳文を推敲し、最終的な成果物を仕上げていく。その過程で行われる協議や相互検討は、訳文の改善のみならず、翻訳判断の根拠を言語化する訓練ともなり、最終的には個人としての翻訳能力向上に結びつく。このようなアプローチは、実務を強く意識した教育実践であると同時に、実際の社会でのコミュニケーションの需要と翻訳の応用的価値を強調する機能主義的翻訳理論とも一致しており、本研究における翻訳ワークショップの理論的基盤となる。次節では、

機能主義的翻訳理論について説明する。

2. 2. 機能主義的翻訳理論

機能主義的翻訳理論は、翻訳を目的を持った異文化間の行為と捉える理論である。機能主義的アプローチでは、翻訳のプロセスと言語構造を決定するのは予期的機能、つまりこれから作成する訳文テクストの目的であり、それは翻訳の発起者（つまりクライアントや依頼者）のニーズによって決定されるとする（ベイカー、サルダーニャ, 2009/2013, pp. 88-89）。この考え方は、翻訳を現実の依頼状況に即して捉え、具体的な目的に応じた実践的な行為として位置づけられる。

機能主義的翻訳理論の枠組みでは、Vermeerの「スコポス理論」が中心的なアプローチとなる。また、Reissのテクストタイプ別理論は、訳者がテクストの種類に応じた適切な訳し方を選択するのに役立つ。両理論は翻訳実践と密接に関連し、操作性が高く、本実践研究の理論的基盤におくと考えられる。以下ではそれぞれの理論について説明する。

2. 2. 1. スコポス理論

訳文の目的と翻訳行為の目的を表すために、ドイツの言語学者である Vermeer (1978) はギリシャ語のスコポス (Skopos:目標、目的) を翻訳理論に導入し、「スコポス理論」を提案した。その基本的な主張は、訳文は翻訳の目的によって決定されるというものである。

スコポス理論によれば、全ての翻訳は「スコポス規則」（翻訳は目的によって決定される）に従わなければならぬとされている。また、「一貫性規則」（訳文の文脈や論理が読者にとって自然につながり、誤解なく理解できるものでなければならない）と「忠実性規則」（訳文は原文の内容や意図と対応し、両者の間に不整合が生じないようにしなければならない）にも従わなければならず、これらの規則は重要性に応じて階層的に配置されている。忠実性規則は一貫性規則に従

属し、一貫性規則と忠実性規則の両方はスコポス規則に従属する。つまり、訳者はまず翻訳が意図した目的を達成することを保証し、次に訳文が内部的に首尾一貫していることを保証し、最後に訳文と原文との一貫性を保証しなければならない (Munday, 2007, p. 118)。

翻訳プロセスにおいて、訳者がスコポス理論を適用する意識と能力は「スコポス意識」と呼ばれる。これは個々の文や語の置き換えに注目するのではなく、まず全体の目的や方針から出発して訳出を考えるという意味でトップダウンの思考システムを示すものである。このような思考によって、訳者は局所的な言語表現にとらわれず、クライアントのニーズや読者の期待に照らし合わせながら、全体的・戦略的な視野で翻訳プロジェクトに取り組むことが可能となる。

2. 2. 2. テクストタイプ別理論

Reiss (1971/2000) は、Karl Bühler が提唱した「organon model」⁴における言語機能を翻訳理論に適用し、各々のテクストに優先する目的と機能によって、情報型 (informative text), 表現型 (expressive text), 効力型 (operative text) の3つのテクストタイプを考案した。

情報型テクストの主な機能は情報の伝達であり、原文テクストの指示的・概念的内容が完全に伝達されればその翻訳は成功だとみなされる。このタイプのテクストには説明書や教科書などがある。表現型テクストは原文テクストの美学的・芸術的形式の伝達を目的とし、文学作品、詩などがこのタイプに入る。効力型テクストは読者を説得して何らかの行為をするように訴える機能が重視され、このタイプのテクストには広

⁴ ドイツの心理学者で言語学者のビューラーによるコミュニケーションのモデルである。言語をメッセージの伝達という観点から、叙述、表現、訴え3つのコミュニケーション機能を定義した。

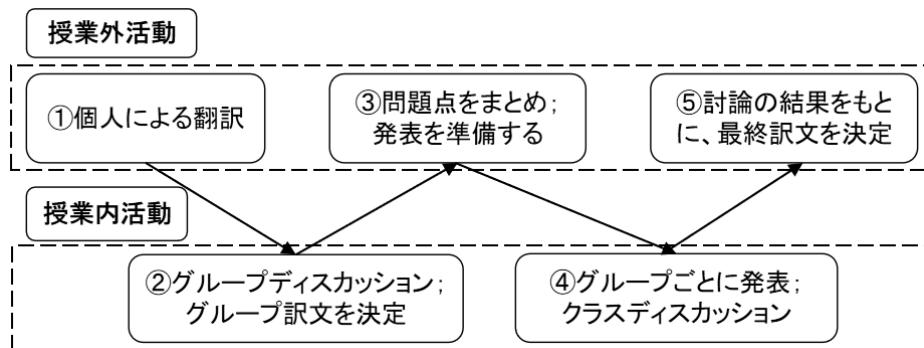


図1. 翻訳ワークショップの流れ

告や宣伝などが入る。

テクストタイプ別理論により、学生が異なるタイプのテクストの特徴を理解し、より専門的な言語表現や適切な言語スタイルで翻訳できるようになることが期待される。

3. 実践研究の概要

3. 1. 実践研究の目的

本実践研究の目的は、翻訳ワークショップを取り入れた翻訳教育を通じて、学生の訳文の変化を明らかにすることである。さらに、学生のスコポス意識に焦点を当て、その変化とスコポス意識との関連性について探求する。

3. 2. 実践対象の概要

本実践研究では、中国A大学日本語専攻の3年生25人を対象に、筆者が担当する翻訳ワークショップを取り入れた翻訳授業を行った。学生の日本語レベルはN2～N3相当であった。

研究に先立ち、授業が開講されるA大学に研究倫理審査申請書を提出し、承認を得た。また、学生に対しては、初回授業時に、授業概要とスケジュールを説明し、研究の趣旨、データの匿名性確保と取扱方針等を口頭で説明した。そのうえで、書面による同意を得た。

3. 3. 翻訳ワークショップを取り入れた翻訳授業のデザイン

本実践研究では、クラスを5つの5人グループに分け、5回の翻訳ワークショップを実施した。ワークショップでは、2回の授業と授業外の時間を利用し、1つの翻訳プロジェクトを2週間をかけて完成させた。訳文の作成プロセスにより翻訳ワークショップは3段階で構成される。その流れを図1に示す。

第1段階は学生の個人訳文作成段階である。教師は1回目の授業が始まる1週間前に翻訳課題を出し、学生は授業前に自主的に翻訳し、同時に翻訳日記⁵を書く。

第2段階はグループ訳文作成段階である。1回目の授業で、学生たちは自分の個人訳文を持ち寄ってディスカッションを行う。授業後、各グループはグループ訳文を整理・作成し、担当者はグループ訳文、グループディスカッションの内容を基にパワーポイント資料を作成する。

第3段階は最終訳文の作成段階である。2回目の授業では、各グループが自グループの訳文とその作成プロセスを中心に順番に発表し、クラス全体で討論を行う。2回目の授業終了後、教師は自らが作成した訳

⁵ 翻訳日記は、主に翻訳する過程での困難や問題などを記述するもの。形式として、学生はWordで翻訳作業を行い、「コメント」の機能を使って、翻訳ブリーフ(注7)付きの翻訳課題文に自分の思考、感想、資料検索など翻訳プロセスに関する内容を記述する。

文を参考訳として提示し、学生の検討材料として各グループの訳文とともにWeChat⁶のクラスコミュニティで公開する。学生は参考訳・他グループの訳文と自グループの訳文を比較し、それぞれの長所や課題を検討した上で、最終的な合意に向けた議論を行う。その後、1つのグループが担当グループとなり、最終訳文を作成する。最終訳文が納得できない場合は、WeChatで合意に達するまで議論をする。

このような形式で、1学期に5回の翻訳ワークショップが行われた。

3. 4. 翻訳課題テクストの選択

実践授業における翻訳ワークショップは実際の翻訳作業に近づけるため、翻訳市場の99%以上を占める(何, 2010, p. 8)非文学テクストを選択した。「クライアント」の要求と訳文の使用目的を学生に明確するため、各回の翻訳課題テクストに翻訳ブリーフ⁷をついた。翻訳課題テクストの選択には、以下の要素を考慮した。生活と密接に関連し、実用性が高いこと、テクストタイプが多様で、文体や言語スタイルに特徴があること、異文化と専門知識が含まれること、難易度は学部生のレベルに適することなどである。このようなテクストを翻訳することにより、学生は翻訳の持つ異文化コミュニケーションという特質をより深く理解し、異なる文化、専門知識、文体スタイルを目標言語で適切に伝達するための工夫をする経験を得られる。以上の基準をもとに、教師(筆者)がインターネット上の記事や翻訳学習教材・参考書等から、5つの翻訳課題を選択した。

6 WeChatとは、メッセージ、チャット、通話などの機能を持つ中国版LINEともいえるアプリである。

7 翻訳ブリーフとはクライアントが翻訳に対する要求である。理想的な翻訳ブリーフには、訳文の予期機能、読者層、伝播メディア、出版時期と場所、場合によっては翻訳の目的や出版の動機などが含まれる(Nord, 2001, p. 60)。

3. 5. 分析方法

3. 5. 1. 分析対象の選定と課題テクストの特質

本稿では、第2回の翻訳ワークショップを分析対象とした。その理由は以下の通りである。第2回の課題テクストは他の課題テクストに比べて、①文化に関する内容や専門知識が多く含まれ、学生は様々な背景資料を調べる必要があること、②テクストタイプ・文体が多様で、適切な訳文表現を行うために、学生がパラレルテクスト(他言語で同じ内容、文体、またはスタイルのテクスト)を多く参照する必要があること、が挙げられる。したがって、第2回の課題テクストは、テクスト分析能力がより求められ、また、スコポス意識の有無、強弱が学生の訳文に表れやすいと判断された。第2回課題テクストを図2に示す。「本プロジェクトは、横浜開港祭公式サイトから抜粋したものです。中国人観光客向けの観光情報サイトに掲載する予定ですので、原文の中国語訳を貴方の翻訳ワークショップに依頼します」との翻訳ブリーフと共に翻訳課題テクストに掲載した。

【本課題文の特質】

この第2回翻訳課題テクストは2021年横浜開港祭の概要紹介及び花火大会開催のお知らせである。翻訳ブリーフでは、訳文は中国人観光客向けのサイトに掲載するものであり、観光情報を提供するという翻訳の機能が指示されている。原文分析から、原文テクストはスピーチとお知らせから構成され、Reissが提出したテクストタイプと照合すると、情報型テクスト、表現型テクストと効力型テクストの混合するテクストである。したがって、テクストは情報の伝達、言語表現の美的効果、読者に影響を与えるなどの言語機能を持つ。訳文の目的は、原文の内容を伝え、読者の望ましい反応を誘発することであり、全体として内容と喚起に重点を置くことになる。訳文の言語表現は文体によって異なる。公用文であるスピーチの部分(例:開催趣旨の説明)は、言語表現がフォーマルで規格的で

横浜開港記念みなと祭 国際花火大会

ハマの夏には、やっぱり花火がよく似合う、ミナト横浜に夏の到来を告げる風物詩！

横浜港は安政6（1859）年6月2日に開港し、これを記念する「横浜開港記念みなと祭」は5月3日の国際仮装行列を皮切りに、6月の開港記念バザーや横浜開港祭などのイベントが実施され、それぞれ回を重ねるごとに盛大になっています。

40回を迎える「横浜開港祭」は、毎年6月2日の開港記念日を開催日として、これまで「開港を祝い、港に感謝しよう」というコンセプトのもと、市民の皆様と協働しながら、横浜の初夏を彩る風物詩の一つ育ってきています。横浜開港祭を多くの方々の参加で盛り上げ、横浜の魅力を全国に更に世界に向け発信し、より多くの方々が横浜に来ていただけようお祈りしてまいります。

第40回横浜開港祭実施

昨年は、新型コロナウイルス感染症の影響で、1982年の第1回開催以来、初めて開催を見送りました。今年の横浜開港祭では、万全の感染症対策を講じ、皆様と御一緒に、これまでの横浜の歴史に想いを馳せ、開港をお祝いしたいと思います。様々な花火が横浜港をバックに咲き誇り、色とりどりなレーザー光線や迫力の音響、炎などが一体となって盛り上げ、光と音の競争をお楽しみください。

開催主旨：“Thanks to the Port” 「開港を祝い、港に感謝しよう」～想いを 重ねて
未来へ～をコンセプトとし、これまでの伝統を引き継ぎ、更に発展させる事で、横浜開港祭を未来へと永く繋げて参ります。我々の原点である開港という歴史にしっかりと触れて頂き、横浜市民と共に港の誕生日を祝い、横浜の更なる飛躍に繋がる原動力として実施して参ります。

開催目的：(1) 市民と共に横浜開港記念日を祝い、港へ感謝する
(2) 笑顔溢れる豊かな市民文化の創造
(3) 港町横浜らしい活力ある町作り
(4) 横浜の観光と経済の活性化

開催時間：2021年6月2日（水）

見学場所：すべて打ち上げ花火で、仕掛け花火の予定はありませんので、臨港パークをはじめ、横浜港周辺で見ることができます。立ち入り禁止地域以外の安全な場所で見学できます。

主 催：横浜開港祭協議所

図2. 第2回翻訳ワークショップでの課題テクスト

あり、シンプルでわかりやすく訳す必要がある。一方、「様々な花火が横浜港をバックに咲き誇り、色とりどりなレーザー光線や迫力の音響、炎などが一体となって盛り上げ、光と音の競争をお楽しみください」といった花火の描写は、華麗で視覚的・聴覚的なイメージ喚

起を目的としており、変訳⁸や等効⁹などの翻訳技法で

8 「変訳」とは、原文の意味や感情をよりよく伝えるために、翻訳の際に原文の一部の品詞や文の成分を意識的に調整・変更することである。

9 「等効」とは、原文に対して読者が持つ反応と同じものを訳文でも生み出すことである。

訳し、訳者は比較的自由度を持つ。

3. 5. 2. 評価と測定の方法

(1) 訳質評価

訳質評価は、賴慈芸（2008）の「6-4スケール」を基に肖维青（2012）が開発した「新・6-4スケール」（付録1）を使用する。「情報の正確性スケール」「表現スタイルスケール」の2つの区分から構成され、前者は情報伝達の質に基づく6段階で評価され、原文の意味がどの程度正確に伝達されているかを測定する。評価項目には、誤訳の有無、重要な情報の訳抜け、誤解を招く可能性のある表現の有無などが含まれる。後者は表現スタイルの質に基づき、4段階で訳文の表現の流暢さや自然さを評価する。この部分では、訳文が目標読者にとってどれだけ理解しやすく、文体が適切であるかが考慮される。スタイルの評価は、単に言葉の選択にとどまらず、テクスト全体の調和や一貫性にも焦点を当てている。具体的な評価基準を付録に示す。

(2) スコポス意識の指標

本研究では、翻訳の過程において、訳者が意識的に翻訳の目的を自身の翻訳行為の指針とすることを「スコポス意識」と捉える。これは訳文読者、目標言語、目標文化に対する訳者の認知的努力を指す。目的に対する認識は数値化して評価することはできないが、訳質評価と学生の翻訳プロセスの観察を組み合わせることで導き出すことができると思った。スコポス意識は主に次のような側面に反映される。

- (i) 翻訳意図の明確さ：翻訳プロセスにおいて、学生は翻訳の目的・訳文の機能を明確に理解・把握できているかどうか。
- (ii) 読者志向：より効果的な情報伝達を実現するために、学生は訳文読者の背景、文化的文脈、言語慣習に基づいて翻訳の意思決定を行い、読者のニーズや期待を翻訳プロセスに取り入れることができているかどうか。

(iii) 文化的適応力：学生は読者が訳文を理解し、受け入れられるように、翻訳において文化的要素を考慮し、適切な表現を選択することができるかどうか、また起点言語と目標言語の文化的差異をどの程度認識しているか。

本研究は以上の3側面について、学生のスコポス意識を訳文とプロセスの両方から評価する。まず、I訳文の言語表現においては、I-①目標文化・言語の規範に適応させるため、翻訳テクニックを柔軟に使用しているか；I-②テキストタイプ・文体に合致した言語スタイルを反映させているかを検討する。II翻訳プロセスについては意思決定に着目し、II-①意識的に訳文読者の配慮し、また翻訳ブリーフを参考にした「トップダウン」の思考システムが用いられているか；II-②関連知識・パラレルテキストなどの資料を検索しているかに焦点を当て、スコポス意識の有無と程度を明らかにする。

3. 5. 3. 分析手順

分析対象として5つのグループのうち、第2回の翻訳ワークショップ第1段階から第3段階全過程の翻訳作業に取り組み、最終訳文を整理し作成する1つのグループ（5人）を抽出した。以下の分析ではグループメンバーを学籍番号順にA, B, C, D, Eで示す。

前項を踏まえ、以下の手順で分析を行った。まず、訳質評価では、3名の日本語教師が「新・6-4スケール」を用い、翻訳ワークショップ3段階の訳文をそれぞれ採点した。点数が異なる場合は討議により、統一した結論を出した。

その後、訳文分析を行った。訳文分析では、この訳文得点のもとに、翻訳のプロセスを示すデータ（翻訳日記、学習日誌、グループディスカッションの録画、最終訳文の作成報告など）を照合しながら、質的記述

的に分析¹⁰を行った。具体的には、(1) 個人訳文をデータとし、翻訳プロセスデータを参照しつつ、スコポス意識と個人訳文の質との関係を検討する。(2) グループの訳文を個人訳文と比較し、訳文の変化した箇所を抽出し分析する。翻訳プロセスデータを参照しつつ、訳文の変化とスコポス意識との関連性を検討する。(3) 最終訳文をグループ訳文と比較し、訳文の変化した箇所を抽出し分析する。翻訳プロセスデータを参照しつつ、訳文の変化とスコポス意識との関係を検討する。

4. 分析の結果

「新・6-4スケール」の基準により、訳質評価の結果を表1に示す。5人の個人訳文を評価したところ、Aは5点、BとCは8点、Dは4点、Eは7点という結果であった。また、グループ訳文は9点、クラス訳文は満点の10点となった。

表1. 訳質評価の結果

評価対象	訳文得点 (10点満点)
学生A	5
学生B	8
学生C	8
学生D	4
学生E	7
グループ	9
クラス	10

訳質評価の結果より、翻訳ワークショップの経過について、作成した訳文の質が向上していることが示された。以下では各段階における訳文を検討する。

10 質的記述的研究方法とは、主題や現象をより深く理解するために質的データを用い、その詳細な分析を通じて主題に関する深い洞察を提供する手法 (Sandelowski, 2000) である。

4. 1. 翻訳ワークショップ第1段階：個人訳文

個人訳文の訳質評価の結果、B, Cは8点、Eは7点、Aは5点、Dは4点であった。以下では各学生の訳文の特徴を具体的に分析する。

4. 1. 1. 第1段階における訳文分析

得点の高かったB, Cでは、個人訳文は全体として意訳が多い特徴が見られた。中国語の言語規範に適合する表現を使っており、言語表現は比較的流暢で自然なものであった。また、テクストの文体的特徴を持つ部分に専門的な表現を用い、可能な限りテクストタイプに近づけることができていたことが高得点につながっていた。二人の翻訳日記には、翻訳過程での考え方や思いが多く記述され、訳語の選択、原文の理解、訳文の表現について慎重に検討していたことがうかがえ、日記の記述自体が内容豊かなものであった。また、Cは参考にした情報源も詳しく記しており、情報へのアクセスは多く多元的であった。訳質評価が10点満点とならなかった原因として、言語能力の不足により、訳文に誤訳がみられたこと、また、原文の構造や言い回しに制約され、自然さに欠ける訳文もあり、それが情報を伝えるという訳文の機能に影響し、翻訳の目的を十分に達成できていなかった点があげられる。

4. 1. 1. 1. 学生Bの訳文分析

Bの翻訳日記には、翻訳過程の思考が詳しく記されていた。また、提供された翻訳ブリーフにおいては「中国人観光客向けの観光情報サイトに掲載する」という文の「中国人観光客向け」に太字と下線が引かれ、情報の焦点に注目し、翻訳の目的を強く意識していることがうかがえた。Bの翻訳プロジェクトとして作業する意識と、意思決定の根拠が明確であった。以下では、特徴的な例をあげて具体的に説明する。

【a】読者配慮と文化的適応

(1) Bは原文のタイトルの「横浜開港記念みなと祭」を「横浜开港纪念节」と翻訳した。これについてBは

翻訳日記に、「この「みなど祭」の訳し方に迷っている。中国の伝統文化の影響を受けて、「祭」という文字が不吉で、中国人観光客を困惑させる可能性があると思う。辞書に載っている「码头节」「港口节」は、ちょっとくどい気がする。「横浜开港纪念节」のほうが簡潔でいいかもしれない」と記述していた。Bは単なる言語の転換ではなく、読者により良い読み体験を提供するために、言語表現の読みやすさを求め、文化的背景を配慮した上で翻訳を行ったと考えられる。

(2) 原文における2箇所の「風物詩」の翻訳は、Bは異なる訳し方をとった。Bは「ミナト横浜に夏の到来を告げる風物詩」における1番目の「風物詩」は「风物诗 (=季節・文化を象徴する情緒的な事物)」そのまま直訳した。理由について翻訳日記には以下のように記されていた。「辞書では、「風物詩」は「风景诗, 景物」の意味。でも、中国の散文では自然を表現するために「风物诗」という言葉が使われることがある。テクスト全体から見ると、「风物诗」のままでも詩的で全体にもなじむと思う。」

しかし、「横浜の初夏を彩る風物詩の一つ育ってきています」における2番目の「風物詩」は「风景线 (=景観的に目立つ存在)」と意訳した。Bは日記に「翻訳には用語の一貫という原則はあるが、ここでは「风景线」と意訳した方がいいと思う」と記していた。具体的な理由は記述されていないが、「风景线」と訳したのは、Bが文脈と母語の語感を合わせて判断したものと考えられる。

(3) 「光と音の競争をお楽しみください」における「競争」という言葉について、Bは日記に、「「競争」そのまで意味は通っているが、ちょっと硬い感じで、「盛宴 (=華やかなイベント)」と意訳した」と記している。

(4) 「横浜港は安政6(1859)年6月2日に開港し、これを記念する「横浜開港記念みなど祭」は5月3日の国際仮装行列を皮切りに、… (略)」における「これ」の翻訳について、Bは、「ここの「これ」が気になる。「これ」を明確に訳すことが重要だと思う。そうしなけ

れば意味的に不明瞭に感じられる」と記述していた。

以上の例が示すように、Bが訳文読者、目標文化を考慮し翻訳を行っていたことが窺える。

【b】テクストタイプの理解と翻訳意図の反映

Bは原文テクストの冒頭文「ハマの夏には、やっぱり花火がよく似合う」を直訳ではなく、「观横滨夏夜景，衬火树银花色」と詩的かつ対句構造を用いて意訳した。翻訳日記は、「このテクストは横浜開港祭の紹介文というより、観光客に訪れてもらい、地域の観光産業を振興するための広告に近いと思う。もっと詩的な表現であれば、紹介文を読んだ中国人観光客が「その場に身をおく」ような気分になれるので、「広告」としての価値にも合致しているのではないか」と記していた。これは翻訳においてBがテクストの特徴と目的に合致した訳文の実現を意識していることを示しており、Bのテクストタイプに対する考慮がみとめられる。

4. 1. 1. 2. 学生Cの訳文分析

Bと同じく8点と高得点だったCの訳文は、言語表現が一定の専門性を示し、長文翻訳は原文の構造に拘らず、中国語の言語規範に適合していた。以下に具体的に述べる。

【a】言語スタイルにみる読者志向

「40回を迎える「横浜開港祭」は、毎年6月2日の開港記念日を開催日として、これまで「開港を祝い、港に感謝しよう」というコンセプトのもと、市民の皆様と協働しながら、横浜の初夏を彩る風物詩の一つ育っています。横浜開港祭を多くの方々の参加で盛り上げ、横浜の魅力を全国に更に世界に向け発信し、より多くの方々が横浜に来ていただけようお祈りしてまいります」という段落は、「方々」「お祈りしてまいります」などの表現が示すように、スピーチ文の文体的な特徴が顕著である。この部分について、Cは意訳を用い、「值此之际 (=この機に)」「在此 (=この場を借りて)」「莅临 (=ご来臨)」などの訳語が用いられている。これらの表現は、中国スピーチ特有の公式的・フォーマルな文体を十分に体现しており、訳文読者に対しても

原文に近い読む体験をもたらしている。そのため、Cの翻訳は動的等価¹¹を達成していると評価できる。

【b】翻訳テクニックとパラレルテキストによる言語規範への適応

日本語は助詞や助動詞が多く使われるため、修飾節が長く、並列句・中間句の多い構造が複雑な文が多く見られる。一方、中国語は節が多く、短い文が多い。原文の「横浜港は安政6（1859）年6月2日に開港し、これを記念する「横浜開港記念みなと祭」は5月3日の国際仮装行列を皮切りに、6月の開港記念バザーや横浜開港祭などのイベントが実施され、それぞれ回を重ねるごとに盛大になっています」は典型的な長文である。Cは翻訳テクニックを柔軟に取り入れ、「分訳」¹²で訳文を3つの短文に変換した。「横浜港于1859年6月2日开港。为纪念此事，人们设立了横滨开港纪念大会，并于每年5月3日举办国际化装游行活动。以此为开端，发展到之后于6月举行的开港纪念集市及横滨开港节，纪念大会逐年盛大起来（=横浜港は1859年6月2日に開港しました。これを記念するために、「横浜開港記念みなと祭」が設けられ、毎年5月3日には国際仮装行列が開催されています。これを皮切りに、その後6月に開催される開港記念バザーや横浜開港祭へと発展し、記念祭は年々盛大になっています）」。CはBと同じように、原文で修飾語として使われている「これを記念する」を独立した短文に再構成し、内容を明確化している。また、「記念大会」という訳語は「分訳」した後に主語を追加したもので、

「加訳」¹³を使って訳されている。全体として中国語の表現に沿った、スムーズで自然な訳文になっている。

また、翻訳の思考を記した翻訳日記ではCは、「ミナト横浜に夏の到来を告げる風物詩」という原文について、(1)「ミナト」の翻訳について、「港は東京都に属していますから、関東地方にある横浜市とは地理的に関係がない。そして、横浜港はこのような言い方はない。ここでいう「ミナト」の意味はよくわからない。でも、文脈から「横浜港」に訳した」と記しており、背景資料をもとに、わからない部分が推理を通じて訳語を決定していることが説明されている。(2)「風物詩」の翻訳について、「中国人観光客向けの言葉なら、独特な文化的意味を持つ「風物詩」をそのまま直訳せず、中国語の文脈によるものに置き換えたほうがいいと思う」と記述していた。さらにCの翻訳日記には多くの資料検索のソースが記されていた。通常の検索エンジンだけでなく、「知乎」（=知識の質問と回答のプラットフォーム）、「微博」（=若者がよく使うInstagramのようなオンラインプラットフォーム）、日本の関連サイトなど、多様な情報源から必要なものを検索し、翻訳の決定の根拠としていた。

上記の内容から、BとCは比較的強いスコポス意識を持っていたことがわかる。このスコポス意識のもと、翻訳を目標文化や目標読者に適合させ、翻訳テクニックを合理的かつ柔軟に用い、目標言語の表現慣習・規範に合致する訳文を工夫していたといえる。

4. 1. 1. 3. 学生Eの訳文分析

訳質評価の結果、EはB、Cに次いで10点中7点であった。原文の主な内容が適切に伝わり、ほとんどの訳文が中国語話者にとって読みやすいものであった。訳文全体を見ると、Eの言語表現には明らかな意訳の傾向があり、中国語の表現慣習に近づけ、訳文をより自然なものにしようとしていたことがうかがえ、

11 動的等価 (dynamic equivalence) は、米国の翻訳学者Nidaが提唱した翻訳理論の中心概念である。訳文が受け手に与える効果や反応が、原文の受け手が受けるものと「実質的に同等」であることを重視する翻訳方略を指す (Nida, 1964/2003)。

12 「分訳」とは、翻訳の際、一つの文をいくつかに分割して訳すことである。

13 「加訳」とは、翻訳の際、原文にない言葉をつけ加えて訳すことである。

一定のスコポス意識が示されていた。例えば、「これまでの横浜の歴史に想いを馳せ」という原文を四字熟語の「回首过去 (=過去を振り返る)」と意訳し、翻訳日記で、「直訳ではなく、中国固有の表現を使った」と記述していた。また、「開港をお祝いしたいと思います」も同様に四字の「祝贺开港 (=開港を祝う)」と訳した。これは「回首过去」と対になる表現として、明確かつ簡潔で中国語のスピーチ文の言語スタイルになっており、訳文読者と目標言語文化に対する考慮を示している。

しかし反面、Eの訳文には、不適切な表現や不適当な省略などの問題がより顕著に見られ、意図的な意訳による誤訳や訳抜けの結果であると考えられた。以下に具体的に記述する。

【a】語彙選択の誤り

(1) 「笑顔溢れる豊かな市民文化の創造」の「笑顔溢れる」を「热情奔放 (=感情表現が豊かで自由奔放なさま)」と訳した。「笑顔溢れる」には「喜びや楽しみが溢れる」という意味しかないが、Eの「热情」や「奔放」という訳語は、原語の意味と異なり、原文の内容を余分に伝えすぎる過剰翻訳となっている。

(2) 「レーザー光線」を「霓虹灯 (=ネオンライト)」、「迫力の音響」を「炮竹声 (=爆竹の音)」と訳した。Eは翻訳日記で「これは花火の音なので「炮竹声」と訳した」と記している。しかし、「霓虹灯」と「レーザー光線」、「炮竹」と「花火」は全く別物であり、誤訳となる。

【b】説明を欠いた省略

Eの訳文では、「市民の皆様と協働しながら」「(多くの方々の参加で)盛り上げ」など原文では実質的な意味を持つ表現が説明なしに省略されており、伝達情報が不足している。

以上からEの訳文は、一定のスコポス意識によって意訳が多く見られるが、過剰な意訳による語彙や表現の不適切さも顕著であった。誤訳や訳抜けは訳文読者に誤った情報をもたらし、スコポス理論の「忠実性

規則」にも反している。

4. 1. 1. 4. 学生Aの訳文分析

訳質評価の結果、Aの訳文は10点中5点であった。Aの訳文の最も目立った問題は、テクストタイプの無視にある。Aの訳文では、フォーマルな文体ではなく、話し言葉が多く見られた。例えば、「滨島的夏天，果然和烟花超配 (=浜島の夏は、やっぱり花火とめちゃくちゃ相性ぴったりだね。)」「实施了一些比如6月开港纪念义卖活动和横滨开港祭等这样的一系列活动 (=例えば6月の開港記念バザーや横浜開港祭など、いくつかのこのような一連の活動を実施しました。)」などのAの訳文には、「超」(=「マジで~」「超~」に相当する若者言葉)「一些」(=「いくつかの~」に相当し、曖昧な数量を表す)「这样的」(=「こんなふうな」に相当し、軽い語感を持つ)などの表現が使用されているが、これらはいずれも話し言葉的な表現であり、文体や言語スタイルに極めて適合していない。また、原文の誤った理解により、全体的に誤訳が多い。例えば、「在第四十次迎来“横滨开港祭”后，将每年6月2日开港纪念日定为举办日期… (=第40回を迎えた後に、「横浜開港祭」は毎年6月2日の開港記念日を開催日と定めました…)」のように、「40回を迎える」が「迎来……后 (=～を迎えた後)」と誤って時間的な経過を示している点にある。さらに、中国語の文法ミスが多く、中国語として通じない訳文も散見される。例えば、「希望着越来越多的人能到横滨」について、「希望」の後に「着」を付ける表現は不自然である。また、「打造充满横滨活力的港口城市」について、「横浜活力」というフレーズも曖昧で、この表現では「活力」が「横浜」の特性としてではなく、「港町」を修飾する形容詞として理解されるべきであるが、その点が不明瞭である。加えて、段落の冒頭のスペースをあけないなど基本的な書式の問題もある。Aの翻訳日記には記述が少なく、翻訳に対する思考・意思決定の根拠がほとんど記されていない。

以上から、Aは翻訳ブリーフを無視し、翻訳実践を

クライアントに提出する翻訳プロジェクトとして扱っておらず、ただ言語転換の宿題のような姿勢で翻訳していたことがうかがえる。このことは、Aのスコポス意識の欠如を示すものであろう。

4. 1. 1. 5. 学生Dの訳文分析

訳質評価の結果、Dの訳文は4点であった。Dの訳文は表現の誤りが多く、目標言語である中国語そのものが通じないという表現上の問題が顕著であった。他の学生の訳文においても、原文の意味を誤解していたり理解していなかったりしていた部分も散見されたが、読者を理解してもらうために、訳文の表現に力を入れ、できるだけスムーズになるように努力していたことがうかがえた。しかし、Dの訳文はほとんど解読不能であった。これは単に原文の理解不足によるものではなく、Dが訳文に対するモニタリングの意識や能力に欠けているため、母語の表現を最適化することができないためと考えられる。

例えば、(1)「ハマの夏には、やっぱり花火がよく似合う、ミナト横浜に夏の到来を告げる風物詩!」をDは「果然还是烟花适合滨的夏天，而 MINATO 横滨是夏天到来的特色！」と訳していた。原文では強調のためにカタカナが使われ、「ハマ」は「横浜」であることが理解されておらず、言葉の意味がわからないままに訳し、中国語では通じない訳文になっている。(2)「盛り上げ」「お楽しみください」の意味を理解しておらず、「…炎などが一体となって盛り上げ、光と音の競争をお楽しみください」を「热闹的声音和火焰等共同活跃起来，享受光与声的竞争」と訳し、中国として文意がまったく通じない。Dが原文の意味や意図を理解していないこと、訳文の表現も中国語の習慣に合致していないことが、以上の訳例からあきらかであり、スコボス理論の「一貫性原則」に反している。

また、Dの翻訳日記には語彙の辞書で調べた訳語しか書かれておらず、その訳語を検証することなく、ほぼそのまま使っている。前掲のAと同じように、翻訳に対する思考がまったく認められない。Dの訳文や

翻訳日記からは、Dが自分の伝えたいことを読者に理解してもらう必要性に気付いておらず、翻訳は単なる言葉の置き換えではなく、原文の意味や作者の意図を理解し、翻訳の目的に応じて目標読者に伝達するための作業であることも理解しておらずに、スコボス意識が欠如していたことがわかる。

4. 1. 2. 第1段階の考察

上記5名の個人訳文と翻訳過程を反映した翻訳日記の分析から、最初の個人訳文段階では、5名の訳文の間には訳質の差があり、訳質の高かった者ほど明確なスコボス意識を持っていたことがわかった。一方、訳質の低い学生は、ほとんどスコボス意識を示しておらず、課題文を翻訳ブリーフを踏まえた翻訳プロジェクトではなく、通常の授業課題として扱っていたことがうかがえた。以上から、良い訳文作成には訳者のスコボス意識が必要であり、スコボス意識は訳文の質に直接影響することが示唆される。

学生の訳文の状況や翻訳プロセスのデータから、スコボス意識は学生に以下の側面で役立つと考えられる。

【1】翻訳の目標を明確にし、訳者に体系的なガイダンスとフレームワークを提供する。スコボス意識により、学生は翻訳が単なる言葉の変換ではなく、原文の思想と情報を訳文読者に伝えるための媒体であることを認識できる。原文作者の意図や訳文読者のニーズをよりよく理解し、翻訳し始める前にマクロな考えを持つことで、翻訳作業が盲目的・恣意的なものになることを避けることができる。この「トップダウン型」の翻訳思考のもとで、学生はより適切な翻訳ストラテジーを選択することができる。

【2】訳文が目標言語・文化と文体的特徴に適合することの重要性を強調し、目標読者の文化的背景・言語規範、異なる文体スタイルを考慮するように指導することにつながる。スコボス意識により、学生は訳文の正確さと流暢さを求めるだけでなく、言語スタイル

や文化的適応性にも重点を置くべきであることを認識する。スコポス意識を持つことで、学生は目標文化、テキストタイプ、文体に適合する訳し方と表現を選択し、訳文の受容性と読みやすさを高め、訳者としての専門的なスキルを向上させることができる。

4. 2. 翻訳ワークショップ第2段階：グループ訳文

第2段階のグループ訳文は、上掲の5人の個人訳文をもとに、グループディスカッションによって、互いの意見交換を経て形成されたものである。訳質評価では9点となり、いずれの個人訳文より優れていると評価された。

4. 2. 1. 第2段階における訳文分析

グループ訳文には、明らかな文法ミスはなく、言語表現はより自然で流暢であり、訳文の形式と表現は基本的に目標文化における同じ文体を持つテキストの形式と表現規範に合致していた。しかし、優れた表現も見られる一方で、誤訳もまだ残されていた。このため、新・6-4スケールの一つ目の評価区分「情報の正確性」において、6点満点中5点であった。

個人訳文と比較し、グループ訳文において改善された部分には、(1) メンバーの優れた個人訳文をそのまま、あるいは少し修正してグループ訳文として採用、(2) 5人の個人訳文にはない新たな訳文を作成、という2種類の作成プロセスが見られた。

例1-1

ST¹⁴ ハマの夏には、やっぱり花火がよく似合う、
ミナト横浜に夏の到来を告げる風物詩！

BのTT¹⁵ 观横滨夏夜景，衬火树银花色。烟火正是宣告横滨港之夏到来之景！
グループのTT 观横滨夏夜景，衬火树银花色。烟花是横滨港湾宣告夏天到来的一道绚丽风景！

例1-1のグループ訳文では、前半部分にBが個人訳文で用いた詩的な表現が採用され、高度な意訳がなされた。グループディスカッションの記録から、グループの全員がこの詩的な表現が印象的で「読者の関心を引く」という機能的要素を満すことができると一致して考え、採用していたことが示されていた。例1-1の後半部分については、グループ訳文の基とされたBの訳文には「之」が2つ入っており、やや読みにくかったため、それをもとに少し修正し、表現がより流暢になっている。

例1-2

ST	横浜港は安政6(1859)年6月2日に開港し、 これを記念する「横浜開港記念みなど祭」は 5月3日の国際仮装行列を皮切りに、…(略)
BのTT	横浜港在安政六(1859)年6月2日开港，为纪念此事，以5月3日的国际化装游行为开端，……(略)
CのTT	横浜港于1859年6月2日开港。为纪念此事，人们设立了横滨开港纪念大会，并于每年5月3日举办国际化装游行活动。以此为开端，……(略)
グループのTT	横浜港在安政六(1859)年6月2日开港，为纪念此事，以5月3日的国际化装游行为开端，……(略)

例1-2の原文は構造複雑な長文である。学生の個人訳文には、「横浜開港記念みなど祭」の修飾節「こ

14 ST:起点テキスト(source text)=原文テキスト。以下同様。

15 TT:目標テキスト(target text)=訳文テキスト。以下同様。

れを記念する」の訳抜け・誤訳が多く見られた。ただし、BとCは原文を正しく理解し、中国語の表現規範に沿って「分訳」を用い、「これを記念する」を抽出して独立の文にしていた。他の3人では、EとAは訳ぬけ、Dは全文を逐語的に訳し、読みにくい表現であった。グループディスカッションでは、Bが自分の訳文を読み上げた際に、Aは「個人訳文を作る時、「横浜記念みなど祭」には「開港を記念すること」という修飾節があることに気づかなかった」と述べていた。B、Cの訳し方はA、D、Eに新たな気づきを与えた、グループ訳文ではB、Cの翻訳が採用された。

例2-1

ST	第40回横浜開港祭実施
AのTT	第40届横浜开港祭実施(方案)
BのTT	举办第40届横滨开港祭
CのTT	举办第40届横滨开港节
DのTT	第40届横滨港节公告
EのTT	第40届横滨港开港庆典/第40届横滨港开埠节
グループのTT	第40届横浜开港祭实施方案

例2-1の原文はお知らせのタイトルであり、目標文化において固有の表現規範と文体的特徴を持つ。中国語では、動詞としての「実施」は文末に使用することはできないため、BとCの個人訳文では「実施」を「举办」と訳して文頭に置き、「動詞+目的語」フレーズ「举办第40届横滨开港节」にした。これは文としては正しいが、タイトルとしての「動詞+目的語」フレーズは中国語の言語慣習に合致しない。グループディスカッションの録画では、Eは「タイトルとして「実施」のままでは絶対ダメだと思ったから、省略した。でも「第40届横浜开港节」だけではお祭りの雰囲気がなくて、素っ気ない感じがしたから、ネットで2つの表現方法を選んだ。でもどっちがいいか分からない…」と述べていた。Aは「タイトルだから、文末はお知らせで使

われる正式な表現にすべきだと思って、「方案」を追加した」と提案していたが、「方案」に括弧をつけており、書式として正しくない。Dは、「私もAとEと同じ考えだったから、「公告」に訳した」と発言していた。ディスカッションの結果、グループは「方案」がよりフォーマルで文体規範に沿うと考え、全員同意して文末に付けることで、タイトルとしての文体規範と言語特徴に合致する訳文が得られた。

4. 2. 2. 第2段階の考察

上記の訳例から、翻訳ワークショップ第2段階におけるグループディスカッションが、学生の訳質の向上に役立っていたことがわかる。グループ訳文の改善は次の2点で示される。(a) グループメンバーの議論や検討を通じて、グループ訳文は翻訳調が少なくなり、適切なスタイルに沿った流暢で自然なものになった、(b) 各個人訳文の誤訳が指摘され、グループ訳文の精度が向上した。訳質が向上した主な理由として、スコポス意識を重視した翻訳思考への変化が考えられる。

グループの訳文作成後、学生は学習日誌で翻訳ワークショップの第1・2段階での経験をまとめ、その中の記述には考え方の変化が反映されていた。例えば、訳文の一貫性に気付くようになった。第1段階で訳質が低くスコポス意識の見られなかったAは、「正確さを基に、文章の流暢さにも重点を置くべきだ。流暢な訳文にするために、私たちは何度も何度も読み返して推敲した」と記述していた。また、自分たちを訳者と位置づけるようになった。Bは「私たちは訳者として翻訳ワークショップに参加した。訳者にとって最高なことは、自分の翻訳作品が他人からの支持と賞賛を得ることだと思う」と記していた。さらに、翻訳する前に背景に関する情報の把握、資料の準備を行う意識、翻訳する時にテクストタイプや読者などの文外要素に対する考慮が見られた。Cは「事前の資料準備はとても重要で、自分の知識を広げることもできて面白かった。そして、今回の課題は宣伝用のため、最終

的には簡潔で魅力的にする必要がある」と記述し、Eは「今回のテキストは情報型と効力型混合した伝文ですから、私たちのグループはディスカッションの時に公式な表現と中国人読者がこの表現を受け入れるかどうかに重点を置いた」と記していた。テキストタイプや読者に対する考慮によるパラレルテキストなどを探すことは、グループ訳文の精度向上に繋がっていると考えられる。

以上から、翻訳ワークショップにおけるディスカッションによって、学生のスコポス意識が強化され、プロの訳者のような行動が見られるようになった。しかし、これらの改善は主に訳文の言語表現に反映されている一方で、グループ訳文には他の要素による解決されていない誤訳が残されている。

4. 3. 翻訳ワークショップ第3段階：最終訳文

翻訳ワークショップ第3段階のクラスディスカッションにより作成された最終訳文は、新・6-4スケールの評価基準により、「原文の内容を忠実に伝え、誤りがない」、「明確かつ適切な表現であり、語彙、コロケーション、句読点の使用においても適切であり、文体が原文に即している」という基準を満たし、満点の10点と評価された。第2段階のグループ訳文には、学生が解決できない、あるいは気付いていない問題がまだ残っていた。以下では、このような問題を分析対象とし、個人訳文・グループ訳文と対照し、クラス訳文を分析する。

4. 3. 1. 第3段階における訳文分析

【1】グループメンバー全員が気付いていない誤訳

例1-1

ST 1982年の第1回開催以来、初めて開催を見送りました。

AのTT 自1982年第一次举办以来，首次推迟举办。

BのTT 横浜开港祭自1982年第一届举办以来首次延期。

CのTT 横滨开港节自1982年的第一届以来首次推迟。

DのTT 该节日自1982年首届举办以来首次延期。

EのTT 横滨开港祭自1982年首届举办以来第一次被搁置。

グループのTT 横滨开港祭自1982年第一届举办以来首次延期。

クラスのTT 横滨开港节自1982年举办以来首次取消。

上の例1-1はグループ全員が気づいていなかった誤訳例である。原文では2020年開港祭を行わなかつた理由を説明するために、「見送る」という動詞が使われていた。グループメンバーの中国語訳は「延期」「推迟」「被搁置」などが挙げられたが、すべて「延期」の意味であった。グループディスカッションの録画から、学生たちはこの問題について十分な議論を行っておらず、異議なく「計画していたことの実行を延ばす」という辞書的解釈に従い、よりフォーマルな表現である「延期」という言葉をグループ訳文に採用していた。中国語では、「延期」は「その時点では開催されていないが、また開催する予定がある」という意味である。しかし、発表の時に別のグループが「2020年の横浜開港祭は延期ではなく、コロナの影響で中止された」と異議を唱えた。これをきっかけにクラスで議論になり、そのグループの主張した通り、実際の状況は「延期」ではなく「中止」であることが判明した。さらに日本のウェブサイトを調べた結果、「開催を見送る」は「開催をとりあえず中止にし、延期か中止かは判断できない」という意味を表すが、「見送る」は「中止する」と同じような意味で使われることが多く、「中止する」という言い方では角が立つような時に「見送る」という言葉が使われることがわかった。異なる言語間では、多くの言葉は一対一で対応せず、文化的な要因により、単語の意味の範囲が異なる場合が一般的であり、これは翻訳においてよく見られる

ことである。「見送る」は中国語の「推迟」という言葉と意味が一部重なっているが、ずれがある。辞書に従えば、事実と一致しない情報を伝達することになり、重大な誤訳となる。クラスの学生全員が第3段階のクラスディスカッションを経てはじめてこの問題点に気づき、最終訳文において修正がなされた。

例 1-2

- | | | | | | | | |
|--------------------------|-------------------------|--------------------------|--------------------------|--------------------------|------------------------|----------------------------|---------------------------|
| ST 横浜の魅力を全国に更に世界に向け発信し、… | A の TT 横滨的魅力将向全国乃至全世界传递 | B の TT 把横滨的魅力向全国乃至世界各地传播 | C の TT 将横滨的魅力发散到全国乃至世界各地 | D の TT 将横滨的魅力传播到全国乃至世界各地 | E の TT 与全国乃至全世界分享横滨的魅力 | グループの TT 把横滨的魅力向全国乃至世界各地传播 | クラスの TT 将横滨的魅力散发至全日本乃至全世界 |
|--------------------------|-------------------------|--------------------------|--------------------------|--------------------------|------------------------|----------------------------|---------------------------|

例 1-2 の原文の「全国」は日本人読者を対象とした表現であるが、翻訳ブリーフには「中国人観光客向けの観光情報サイトに掲載する予定です」と書かれており、訳文は中国人読者向けであることを学生は留意する必要がある。中国人読者にとっての「全国」は原文読者と異なるものを指すため、訳文では「全国」を「全日本」に変更する必要がある。

しかし、グループの全員がこの点を無視し、グループ訳文では「全国」を残したままであった。ただし、別のグループが提示した訳文「让横滨的魅力能够走向日本，乃至世界」によって、グループの学生たちが気付き、最終訳文で「将横滨的魅力散发至全日本乃至全世界」に修正した。

B は、翻訳日記に「翻訳前に「翻訳ブリーフ」の確認はとても重要だ。「全国」という表現は、個人訳文をした時もグループディスカッションの時も、私たちは「全日本」と翻訳すべきことに気づいていなかった。○ さんたちのグループの PPT 発表で初めて気がつい

た」と記していた。このように、学生の翻訳日記には翻訳ブリーフの重要性について多くの言及があり、翻訳経験を積んで学びを得ることができたと記述されていた。

【2】気付いたが解決が困難な翻訳問題

例 2-1

- | | | | | | | | |
|------------------------------|-----------------------------------|-----------------------------|-----------------------------|-------------------------------|-----------------------------|-------------------------------|---------------------------|
| ST すべて打ち上げ花火で、仕掛け花火の予定はありません | A の TT 因计划为自然燃放烟花，没有预定特殊装置设计的大型烟花 | B の TT 由于燃放的都是普通烟花，没有能变换的烟花 | C の TT 由于发射的都是普通烟花，没有大型礼花组合 | D の TT 为了放完全部烟花以及没有预约到观看烟花的设备 | E の TT 到处都在燃放烟花，因为没有烟花装置的计划 | グループの TT 由于燃放的都是普通烟花，没有大型烟花组合 | クラスの TT 全部使用高空烟花，没有设置近地烟花 |
|------------------------------|-----------------------------------|-----------------------------|-----------------------------|-------------------------------|-----------------------------|-------------------------------|---------------------------|

例 2-1 について、翻訳の難点は「打ち上げ花火」と「仕掛け花火」という2つの専門用語である。両者は中国では区別がなく、文化的に空白の言葉であり、辞書やインターネットにも対応する訳語が示されないため、中国人にとって理解も表現も難しい。学生の個人訳文とグループ訳文では、ほとんどの訳語が自分の理解に基づいて作られており、学習日誌の「翻訳の困難点」という項目への回答では、「花火の区別とそれを翻訳することが難しかった」という記述が多く見られ、自分の翻訳に自信が持てないと記されていた。例えば、B は「普通烟花・变换的烟花 (=一般的な花火・変化する花火)」と訳し、学習日誌には、「打ち上げ花火と仕掛け花火の違いや翻訳について、単語を調べたが、2種類の花火の違いを訳文でどう訳すかは大きな

難題」と記している。Cは「普通烟花・大型礼花组合(=一般的な花火・大規模な花火セット)」と訳し、翻訳日記には関連する情報や対応するウェブサイトのメモをつけていた。彼女は多くの情報を調べていたが、グループディスカッションではまだ自分の翻訳に自信がない様子が見られた。Eも学習日誌で翻訳プロセスにおける問題など、「日本ならではの用語について、情報収集の方法や手段にまだ熟練していない。例えば、「打ち上げ花火」「仕掛け花火」は、まだよく理解できていない」と記していた。最終的に、グループ訳文はCの訳をもとに少し修正し、「普通烟花・大型烟花组合」とされていた。グループ発表において、クラス5グループの訳し方はそれぞれ異なった。どのグループも自信のなさを示し、学生にとって共通の難問であることを反映していた。

この場面では、教師は「足場かけ」の役割を果たし、文化的に空白の言葉に対する考え方や解決法について指導した。原文の「すべて打ち上げ花火で、仕掛け花火の予定はありません」は、後ろにつく「臨港パークをはじめ、横浜港周辺で見ることができる」の理由説明である。したがって、翻訳の焦点は、読者に2種類の花火の区別を提示し、観覧可能な場所の理由を理解させることである。そのために、訳者は両語間の本質的な違いを明らかにし、自分の言葉でわかりやすく表現すべきである。しかし、学生の翻訳では、訳文読者には2つの言葉の違いが理解できず、後続の文との関連性も把握できない。これは読者の混乱を招き、情報伝達の失敗に繋がる。

仕掛け花火は比較的近距離で観覧するのが最大の魅力であるとされる。したがって学生は、「高空」と「地上」という両語の本質的な違いを把握し、それを訳文に明確に表現すべきである。結果的に、教師の指導のもとに、最終訳文では「高空烟花・近地烟花」と翻訳された。この2つの言葉は訳者である学生自身が作ったものだが、中国人読者にとって両方の本質的な違いを明確に区別でき、訳文が伝えたい情報

を十分に理解できる表現である。

4. 3. 2. 第3段階の考察

第3段階では、他のグループの訳文や発表と教師の指導によって、学生は第1・2段階で解決できなかつた、または気づかなかった問題を解決したことが明らかになった。これらの問題の解決は、単なる言語転換に必要とされる日本語能力を超え、学生の文化能力、ツール能力、翻訳専門知識などの素養が強く求められる。

翻訳ワークショップの第2段階では、学生のスコポス意識の向上は主に「どうすれば中国語の表現と一致し、流暢で自然な訳文になるか」「どうすれば求められる文体に近い言語スタイルになるか」など、訳文の言語表現をモニタリングすることに見られた。しかし、第3段階を経て、学生は訳文の言語表現だけでなく、原語と訳語の文化的違い、読者の視点に基づく訳文情報の正確さへの予測・確認に目を向け、翻訳目的の達成と訳文読者への配慮があらゆる側面において必要であることを実感し、スコポス意識がより深まっていったと考えられる。

4. 4. まとめと考察

本研究事例を通して翻訳ワークショップを取り入れた翻訳授業の3段階の訳文とその作成プロセスのデータを分析することで、学生の訳質向上がスコポス意識に関連していることが示された。

第1段階から、学生の個人訳文の質とスコポス意識には正の相関関係があることがわかった。訳質の高い学生ほど、スコポス意識が高い傾向を示し、逆もまた同様であった。第2段階で作成したグループ訳文では、個人訳文に比べ、言語面での向上が明らかであり、表現の質を求める意識が高まったことが示された。クラス訳文を作成した第3段階では、学生は言語外問題の発見・解決において、訳文の言語表現だけ

でなく、文脈・文化にも注意すべきであり、翻訳に対する認識が深まった。第2段階と第3段階では、訳文を改善する過程で、解決された翻訳上の問題の種類によって、学生のスコポス意識の深さも異なっていった。翻訳ワークショップを通じて、学生のスコポス意識は段階的に向上し、読者、文化、文脈を踏まえたよりマクロな思考へと変化していった。同時に、訳質もまた向上した。

一方で、スコポス意識があれば、訳質は必ず良いとは言えない。Bはサブタイトルの「第40回横浜開港祭実施」を「举办第40届横滨开港祭」と翻訳したが、翻訳日記に「直訳した。でも、タイトルとしてはおかしい」と記述し、「動詞 + 目的語」フレーズは通知文のタイトルとして文体的に適していないことに気づいていた。また、開港祭のスローガン「想いを 重ねて 未来へ」について、「タイトルの「庆祝开港，感恩海港(ST: 開港を祝い、港に感謝しよう)」のような形式に対等する訳文にしたいが、中国語の言語能力が不足で難しい」と記述した。Bはタイトルの文体スタイル・表現に沿った翻訳をする必要があることを明確に認識していたが、母国語能力が十分でないため、訳文を文体の規範に完全に適合させることが難しいことがわかった。高品質な訳文を作成するには訳者のスコポス意識が不可欠である。しかし、スコポス意識を持っていても、質の高い訳文ができないケースもあることをBの事例は示している。

訳質は様々な要因によって決まるが、スコポス意識はその一つである。その理由として、次の2つの側面が考えられる。

(1) 言語能力の制約：言語能力の不足により、学生は原文理解や目標言語での表現に制限を受ける。スコポス意識があっても、語彙や文法の知識、表現力が不足しているため、原文を正確に理解できなかったり、適切に表現できなかったりし、訳文の質に影響を与える要因となる。

(2) 経験不足：翻訳は複雑で難しい活動である。文化

の違いを認識し適切に扱うこと、語彙や文章の多義性や曖昧さを理解し判断すること、専門知識を正確に習得し表現することなどが必要である。訳文の質を高めるには経験の積み重ねが重要であるが、学生には実践が不足しており、スキルの向上が難しいことがある。

5. 課題と今後の展望

本研究事例を通して、翻訳ワークショップを取り入れた翻訳教育の効果と制約があきらかになった。以下に課題と改善案を述べる。

(1) 本実践研究における日中翻訳プロジェクトは、学生の母語である中国語で訳文を表現した。翻訳日記などのデータから、学生は母語能力に限界を感じていた。また、翻訳初心者の学生は自分の翻訳調に気付きにくいという傾向が見られた。適切で自然な訳文を作成するには、より幅広い、客観的な意見を得る必要がある。そのため、翻訳ワークショップにおいて訳文の相互評価と教師のフィードバックを積極的に取り入れる必要があると考えられる。

(2) 教育方法として、翻訳ワークショップは学生に実践の機会を提供しているものの、課題が本物の翻訳プロジェクトではなく、実際の依頼文書に見られる多様な分野性や納期制約、品質基準などを十分に体験できない。そのため、現実の翻訳ニーズに適応できる実践経験としては不十分である。改善法としては、翻訳業界と連携し、学生に実際の翻訳プロジェクトへの参加機会を提供することである。これにより、学生は実務的なスキルや知識を養い、翻訳経験を積むことができる。また、業界との連携によって、翻訳ワークショップの内容やカリキュラムを現実のニーズに合わせて改善することも可能となる。

以上の改善により、翻訳ワークショップはより効果的な翻訳教育方法として期待される。本研究は中国の大学生を対象としたが、翻訳ワークショップの枠組み

自体は特定の母語に限定されるものではない。母語の異なる学習者が集まる多言語クラスにおいても、学生同士が共通言語（日本語や英語など）を用いてディスカッションし、相互に多角的な視点から翻訳を検討することができる。また、各自の母語から出発した訳文を比較し合うことで、文化・言語的相違をより明確に意識できる。このように翻訳過程を可視化し、協働的に訳文を検討する手法は、多言語環境でも有効であると考えられる。今後は、他の属性の学習者や他言語を対象とした翻訳教育における応用の可能性についても探求していきたい。

文献

- 霜崎實 (2014). 翻訳ワークショップにおける協同学習の試み『慶應義塾外国語教育研究』11, 71-96. https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA12043414-20140000-0071
- ベイカー, M., サルダーニャ, G. (2013). 『翻訳研究のキーワード』(藤濤文子, 編訳) 研究社. (原典 2009)
- Munday, J. (2007). *Introducing translation studies.* Routledge.
- Nida, E. A. (2003). *Toward a science of translating: With special reference to principles and procedures involved in bible translating* (2nd ed.). Brill Academic Publishers. (Original work published 1964)
- Nord, C. (2001). *Translating as a purposeful activity: Functional approaches explained.* Routledge.
- Reiss, K. (2000). *Translation criticism-the potentials and limitations: Categories and criteria for translation quality assessment* (E. F. Rhodes, Trans.). St. Jerome Publishing.
- (Original work published 1971)
- Sandelowski, M. (2000). Whatever happened to qualitative description? *Research in Nursing & Health*, 23(4), 334–340. [https://doi.org/10.1002/1098-240x\(200008\)23:4<334::aid-nur9>3.0.co;2-g](https://doi.org/10.1002/1098-240x(200008)23:4<334::aid-nur9>3.0.co;2-g)
- Vermeer, H. J. (1978). Ein Rahmen für eine allgemeine Translationstheorie [A framework for a general theory of translation]. *Lebende Sprachen*, 23(3), 99–102. <https://doi.org/10.1515/les.1978.23.3.99>
- 郭晓琳 (2023). 新文科背景下翻译教育“数智化”转型研究 [On the Construction of a “digital Intelligence” translation teaching model against the backdrop of education digitalization.]《创新创业理论研究与实践》19, 10-14. <https://kns.cnki.net/kcms/detail/detail.aspx?dbname=CJFDLAST2023&filename=CXYL202319003>
- 何刚强 (2010). 切实聚焦应用, 务实培育译才: 应用翻译与应用翻译教学刍议 [Focusing on practical application and cultivating translation talents pragmatically: A preliminary discussion on applied translation and its pedagogy]《上海翻译》1, 37-40. <https://oversea.cnki.net/KCMS/detail/detail.aspx?dbname=CJFD2010&filename=SHKF201001009>
- 胡开宝, 李娟 (2024). 大语言模型背景下的翻译人才培养: 挑战与前景 [Cultivating translation talents in the era of large language models: Challenges and prospects]《外语电化教学》6, 3-7. <https://oversea.cnki.net/KCMS/detail/detail.aspx?dbname=CJFDLAST2025&filename=WYDH202406001>
- 賴慈芸 (2008). 四種翻譯評量工具的比較 [A comparison of four assessment tools for translation

- tests]《編譯論叢》1, 71-92. <https://doi.org/10.29912/CTR.200809.0003>
- 李崇华, 张政(2023). 基于数字人文的视听翻译研究范式与理路[Research paradigm and theoretical framework of audiovisual translation based on digital humanities]《外语学刊》1, 61-67. <https://chn.oversea.cnki.net/KCMS/detail/detail.aspx?dbname=CJFDLAST2023&filename=OUTL202301008>
- 李明, 仲伟合(2010). 翻译工作坊教学探微[An exploration of translation workshop pedagogy]《中国翻译》4, 32-36. <https://chn.oversea.cnki.net/KCMS/detail/detail.aspx?dbnam=CJFD2010&filename=ZGFY201004011>
- 刘松(2025). 从规则到生成: 机器翻译技术的演进, 现状及未来发展趋势[From Rules to Generation: The Evolution, Current Status and Future Development of Machine Translation Technology]《山东外语教学》3, 122 - 132. <https://oversea.cnki.net/KCMS/detail/detail.aspx?dbname=CJFDLAST2025&filename=SDWY202503012>
- 日语专业教学指导委员会(2020). 普通高等学校本科日语专业教学指南[四年制大学日本語専攻教育ガイドライン]. 教育部高等学校外国语言文学类专业教学指导委员会(编)《普通高等学校本科外国语言文学类专业教学指南(下)》(pp. 103-129)外语教学与研究出版社.
- 王峰, 王正(2013). 能力导向的翻译教学探究: 兼谈“翻译工作坊”教学设计[A competence-oriented approach to translation teaching: Reflections on the design of “translation workshop” instruction]《现代教育技术》23(4), 76-80. <https://chn.oversea.cnki.net/KCMS/detail/detail.aspx?dbname=CJFD2013&filename=XJJS201304016>
- 肖维青(2012). 《本科翻译专业测试研究》[A study on translation testing in undergraduate programs]人民出版社.
- 张英春(2020). 高校日语专业认知型翻译教学模式的构建[Construction of a cognitive translation teaching model for the Japanese major in colleges and universities]《科教文汇》6, 181-182. <https://doi.org/10.16871/j.cnki.kjwhb.2020.06.079>
- 赵岩, 李淑华(2024). 新时代翻译教学及翻译人才培养模式改革探索[Exploring the reform of translation teaching and talent training models in the new era]《外语电化教学》3, 95-98. <https://link.oversea.cnki.net/doi/10.20139/j.issn.1001-5795.20240314>
- 中国翻译协会(2025). 《2025中国翻译行业发展报告[中国翻訳行業発展報告]》. https://www.tac-online.org.cn/2025-05/06/content_43102089.html

付録. 新・6-4スケール(肖維青(2012)が作成した原版の筆者による日本語訳)

【情報の正確性評価】

6点: 原文と完全に同じ情報を伝える訳文で、誤りはないか、または軽微な誤りが1箇所ある。

5点: 訳文が原文とほぼ同じ情報を伝えており、一般的な誤りが1箇所、または軽微な誤りが2箇所ある。

4点: 訳文が原文と異なる情報を伝えており、一般的な誤りが2箇所、または軽微な誤りが4箇所ある。

3点: 訳文が原文とかなり異なる情報を伝えており、重大な誤りが1箇所、または一般的な誤りが3箇所ある。

2点: 訳文が原文と非常に異なる情報を伝えており、重大な誤りが2箇所、または一般的な誤りが4箇所、または自己の文字通りの解釈のみで構成されている。

1点: 訳文が原文と完全に異なる情報を伝えており、または完全な訳抜けである。

追加条項: 同じ誤りは重複して減点しない。5語以上の訳抜けは重大な誤りとみなされる。

【表現スタイル評価】

4点: 表現が明確で曖昧さがなく、用語、コロケーション、句読点に不適切な点がなく、より原文に沿った文体になっている。

3点: 大まかに明瞭な表現であり、用語や表現に1~2箇所の不適切さ、または誤字などがある。

2点: 理解可能な表現ではあるが、文法上の誤りや多くの不適切な用語や表現がある。

1点: 構文に合わない、理解しにくい、または完全に訳抜けである。

追加条項: 情報の正確性評価が3~4点の場合、表現スタイル評価は3点を超えてはならない。情報の正確性評価が1~2点の場合、表現スタイル評価は2点を超えてはならない。

出典: 肖维青(2012).《本科翻译专业测试研究》[A study on translation testing in undergraduate programs] (pp.294-295) 人民出版社.



The relationship between translation variations and Skopos awareness in translation workshops:

A case study at a Chinese university

FU, Xiaoxu*

*Department of Japanese, School of Foreign Languages,
Yan'an University, China*

Abstract

This study implemented translation education using translation workshops for undergraduate students majoring in Japanese at University A in China. To clarify the relationship between translation variations and students' Skopos awareness developed through the workshop, qualitative descriptive analysis was conducted on the students' translated texts along with data related to their translation processes. The results revealed that Skopos awareness had a direct and positive influence on the quality of the translated texts, indicating that fostering such awareness is crucial for producing high-quality translations. Based on these findings, this study suggests that in future translation education, it is essential to cultivate students' Skopos awareness and that practical translation workshops are an effective approach for achieving this goal.

Keywords: translation education; course design; functionalist translation theory; translation practice

© ALCE 2025. Except where otherwise noted, this article is licensed under the CC BY-SA 4.0 license

* E-mail: fty1206@126.com